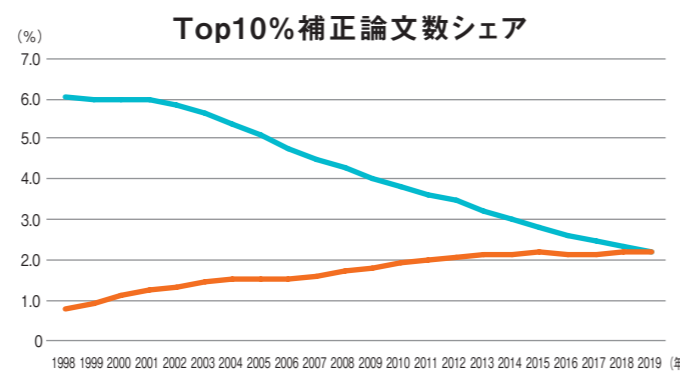
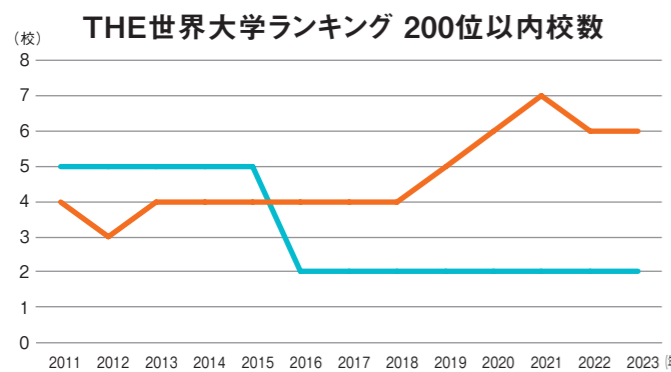
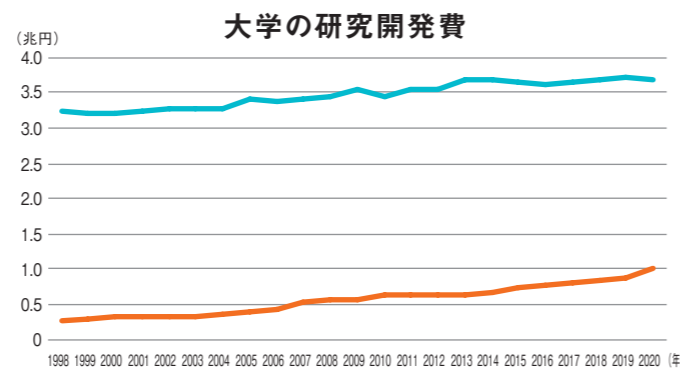
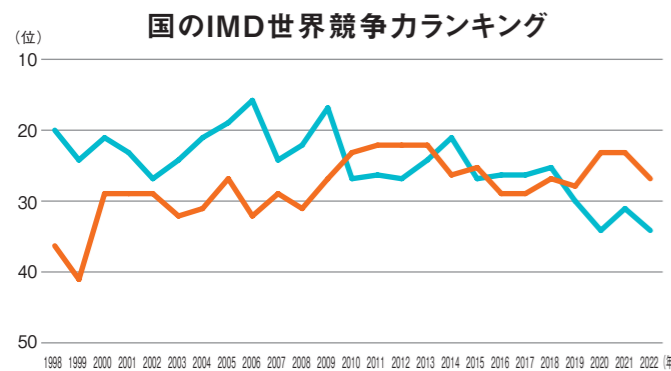
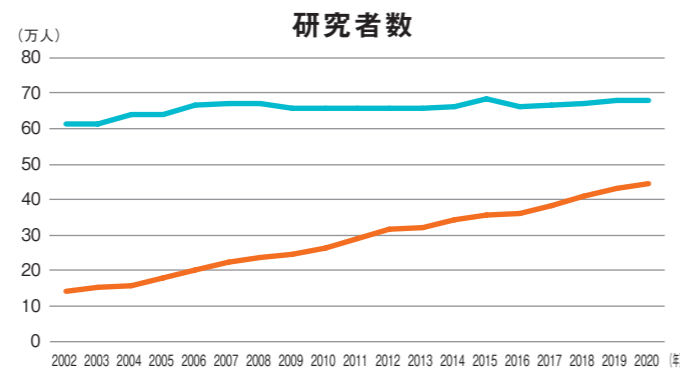


日本の研究力や世界競争力の推移 ～韓国をベンチマークとして

— 日本 — 韓国

*出典／大学の研究開発費、研究者数、Top10%補正論文数シェア：
「科学技術指標2022」(文部科学省 科学技術・学術政策研究所)、
THE世界大学ランキング200位以内校数：
「THE世界大学ランキング2011～2023」(Times Higher Education)、
IMD世界競争力ランキング：「世界競争力年鑑2022」
(国際経営開発研究所：International Institute for Management Development)



**研究力の低下と
大学で行う研究の価値**

日本の研究力の凋落が顕著だ。注目度の高い論文数を示す「トップ10%補正論文数」を見ると、25年ほど前は4位だったが、最新の結果では12位。Times Higher Education(以下THE)の世界大学ランキングの順位も、2011年時点ではトップ200位以内に5校ランクインしていたが、2016年以降は2校のみ。論文を生み出す研究開発費や研究者数は横ばいで、博士課程まで残る研究者の卵の減少は大きな問題だ。国自体の国際競争力も、2006年の16位をピークに下がり、2022年では34位。上の図表は韓国をベンチマークに日本の研究力や国際競争力の経年推移をグラフ化したものだが、今では、研究力も、国の国際競争力も追い抜かれつつある。

大学における研究が他の研究機関での研究と大きく違う点は、研究を教育に生かす、人材育成としての機能が強いことだろう。また、高等教育が初等中等教育と違うのは、教員が自らの研究成果を学生の教育に還元する点である。研究力の低下は、日本の未来を担う人材育成力、つまり教育力の低下に直結するのだ。

これまで、研究、教育、社会貢献に別個のベクトルで取り組んでいたのであれば、それを一つにし、互いに連携して好循環をつくるマネジメントが必要だ。それは、少子化の時代、大学自身の競争力を生み出すブランドづくりにも役立つのではないか。

*「科学技術指標2022」(NISTEP)

文／編集部 P.2写真提供／福井工業大学



研究力を教育力へ ～大学ブランドをつくる人材育成



低迷する日本の研究力。周知のとおり、国は10兆円の大学ファンドをはじめとした大学の研究力強化施策を打ち出している。大学としての研究力向上への取り組みは、研究そのものだけでなく、教育力の向上と社会への貢献に直結する。少子化で学生募集がますます厳しくなる今後、自学の競争力を高めるうえでもあらためて大学の研究について考えてみたい。

